

『家族社会学研究』 投稿規程

(2015年2月18日改訂)

1. 本誌は、日本家族社会学会機関誌であり、年2回発行する。
2. 本誌は原則として、会員の家族社会学関係の研究発表の場とし、家族社会学に関する論文、研究ノート、書評、およびその他で、他に未発表のものを掲載するものとする。
3. 論文は日本語または英語で投稿することができる。
4. 同一号に複数の論文を投稿することはできない。
5. 本誌の編集は編集委員会によって行われ、原稿の採否および掲載の順序は、査読に基づく審査により、編集委員会において決定する。
6. 投稿者は、日本家族社会学会会員に限る。
7. 投稿にあたっては、別途定める執筆要項（最新号および学会ホームページを参照のこと）に従って原稿を作成し、本原稿のほかにコピー3部を添付する（計4部送付）。また手元にコピーを必ず1部保存する。なお、査読を通過した最終稿を送付する際、同ファイルを電子媒体に保存して同封する。
8. 当該投稿論文と関連した、あるいは重複のあるテーマで書かれたり、同一データを用いて書かれた既発表論文、もしくは投稿中の論文がある場合は、そのすべてにつきコピー各4部を原稿送付時に添付する。
9. 執筆要項に定められた字数等の制限を超えた場合には、受理できない。
10. 投稿にあたっては、英文要旨のネイティブチェックを受ける。また、審査過程で、さらに修正を必要とする場合は所定の料金を徴収することもある。
11. 投稿された原稿は原則として返却できない。
12. 著者による校正は、原則として初校のみとする。
13. 掲載原稿については、掲載誌1部を進呈する。
14. 掲載原稿の別刷を希望する場合には50部から作成する。校正の際に希望部数を申し出る。
15. 投稿の締切は、毎年8月末日、2月末日（消印有効）の2回とする。
16. 掲載論文の著作権は、日本家族社会学会に帰属する。
17. 掲載論文等を他の著作に転載・翻訳する場合には、事前に文書等で日本家族社会学会の許可を得る（学会事務局あて）。
 - ・1号から17-2号までは執筆者以外が転載・翻訳する場合
 - ・18-1号以降については著作権は日本家族社会学会に帰属するので、すべての場合
18. 本誌の編集委員会事務局は以下に置くこととする。問い合わせ先および原稿の送付先は、以下のとおり。

『家族社会学研究』編集委員会事務局

〒169-0075 東京都新宿区高田馬場4-4-19 (株)国際文献社

Tel: 03-5389-6492 Fax: 03-3368-2830 E-mail: jsfs-ed@bunken.co.jp

執筆要項

改訂年月日 2013年8月1日

2016年9月10日

2017年9月9日

1. 原稿は原則として、ワープロまたはパソコンで執筆する。その場合、A4の用紙を使用し（縦置き）、横書きにて、原則として40字×30行で印字する。また、注・文献等もすべて本文と同じ文字サイズ、同じ字詰めで印字する。句読点は全角の「。」と全角の「、」を使うことにする。
2. 母語以外で執筆する場合は、投稿前にネイティブチェックを受けること。
3. 原稿の体裁は以下のとおりとする。
 - 1) 1枚目に、必要事項を記入した「投稿申込書」（学会ウェブサイトよりダウンロード可）、
 - 2) 2枚目に、無記名で、(1)和文表題、(2)和文要約、(3)和文キーワード、
 - 3) 3枚目に、無記名で、(4)英文表題、(5)英文要約、(6)英文キーワード、
 - 4) 4枚目から、無記名で、(7)本文、(8)注、(9)引用文献、(10)図表等とする。
4. 和文要約は400字以内、英文要約180語以内、キーワードはそれぞれ3語以内とする。
5. 上記第2項の4)4枚目からの原稿の総字数は、見出し、小見出し、注、文献、図表までを含めて、以下のとおりとする。
 - 1) 論文は、1行40字の書式で、20,000字以内（スペースを含めず）を原則とする。
 - 2) 研究ノートは、論文に準ずるもので、研究上の問題提起、研究プロジェクトの経過報告、他の著書・論文への批判・反論等をテーマとし、1行40字の書式で、12,000字以内（スペースを含めず）を原則とする。
6. 原稿字数を計算する際、図表は便宜上、刷上りを想定して以下の3段階で換算する。刷上り1頁相当の場合は1,600字に、刷上り1/2頁相当の場合は800字に、刷上り1/4頁の場合は400字に、それぞれ換算する。
7. 本文頁には、頁下中央部に、必ず頁番号を印字する。
8. 原稿は、「である調」「新かなづかい」「常用漢字」による執筆を原則とする。
9. 本文中の見出しは以下の順でランクを統一する。
 - I.
 1.
 - 1)
 - a)また、見出し中の副題は2倍ダッシュ「——」でつなげる。
10. 箇条書きには、単語の場合は「①」、文章の場合は「(1)」を用いる。
11. 専門用語はできる限り日本語表記とし、欧文綴りが必要であれば初出箇所に併記する。また略語はできる限り避け、平易な記述とする。略語を使用する際は、初出箇所に正式名を記載し、カッコ内にその略語を挿入する。
12. 注記は本文中の該当箇所に、(1)(2)の肩番号を付し、文末に番号順に記す。
13. 本文中で言及もしくは引用した文献は、漏れのないようにすべてを文献リストに記載しなければならない。逆に、文献リストにあげられた文献は、かならず本文中に対応

する文献注がなければならない。文献注とは、言及もしくは引用の典拠を示すために本文に付けられる注のことである。

- 1) 文献注は、本文中の適切な個所に、カッコ書きで記載する。文献注のカッコは全角の丸カッコ（ ）を用いる。

文献注は、(著者名 出版年)のかたちで表記する。著者名と出版年のあいだには、かならず半角のスペースを入れる。

文献注には、著者名は姓だけを記載する。ただし、一つの論文のなかで参照する文献に同姓の著者が複数いる場合には、文献注の著者名は、漢字表記であれば氏名すべて、アルファベット表記であれば、ファミリーネーム、イニシャルとする。

文献注には原則として著者名と出版年のみを記すが、文脈上必ず必要と思われる場合には引用ページ数を入れることができる。その場合には、出版年のあとに半角コロンと半角スペースでつなぎ、始まりのページ数、半角ハイフン、終わりのページ数を記入する。終わりのページ数が始まりのページ数と同じ桁において同じ数値の場合には、異なる数値の桁のみを記すこと。なお、文献リストにおいて、初ページ-終ページを記載する必要のある場合にも、この方式による。

【例】(布施 1982: 112-3)

- a) 同一著者の複数の文献を参照した場合、各文献の出版年のあいだは、半角カンマと半角スペースでつなぐ。異なる著者の複数の文献を参照した場合、文献と文献のあいだは、半角セミコロンと半角スペースでつなぐ。

【例】(山田 2001, 2007; 松本 2002; 船橋 2006)

- b) 共著の場合、邦文の文献の場合は著者名をナカグロでつなぎ、英語の文献の場合は著者名を and でつなぐ(ドイツ語の文献の場合は und, フランス語の文献の場合は et, 等々)。なお、and は&としてもよいが、ひとつの論文のなかでは一貫した表記法をとらなければならない。

【例】(岩井・稲葉 2000), (Guo and Deng 1998)

共著者が3名以上の場合、ファーストオーサーのみ記載し、「ほか」「et al.」を付ける。

【例】(長津ほか 1996), (Adams et al. 1988)

- c) 同一著者の同じ出版年の文献が複数ある場合には、出版年の後に a, b, …… と小文字のアルファベットを順につけて区別する。

【例】(McDonald 2000a), (McDonald 2000b)

- d) 訳書の場合は、(Goffman 1961=1984)。すなわち、(原著者名 原書の出版年=訳書の出版年)のかたちで記載する。(Goffman 1961=1984: 78)と記載すれば、78 というページ数は訳本のページ数を示すことになる。訳書があっても、原書のほうを参照して自分で独自に訳出した場合には、(Goffman 1961)とのみ記載する。(Goffman 1961: 78)と書けば、78 は、原書のページ数を示している。原書と訳書双方のページ数を示したい場合には、(Goffman 1961: 78=1984: 86)と表記する。

- 2) 文献から直接の引用をせずに、他の研究者の業績に言及しただけの場合や自分の言葉でまとめなおした場合でも、かならず文献注をつけなければならない。このような場合の文献注のつけ方には、研究者名のすぐ後につけるやり方と、言及が終わったところにつけるやり方がある。どちらの方式を採用してもかまわないが、ひとつの論文のなかでは一貫した方式をとらなければならない。

【例】野沢 (2009) によれば、……である。

野沢によれば、……である（野沢 2009）。

また、著者名（出版年）の記載の仕方は、読者にその文献の参照を求める場合にもみられる。

【例】この点については、野沢（2009）を参照されたい。

- 3) 文献は、和文の文献も欧文の文献も含めてすべての文献を、著者または編者（共著・共編書の場合は筆頭者）の姓のアルファベット順にリストアップする。同一著者の文献に、単著のほかに、編書や、その著者がファーストオーサーとなった共著や共編書がある場合には、単著、単独の編書、共著、共編書の順にリストアップする。なお、同一のカテゴリーに複数の文献が複数ある場合は、出版年順にリストアップし、2つめ以降の文献の表示には、氏名の代わりに、————（4倍ダッシュ）を用いる。
- 4) 文献リストの表記については、以下のとおり記述する（イタリック体が表記できない場合はアンダーラインをつけておくが、印刷時にはアンダーライン部はイタリック体で表記される）。また、文献数は必要最小限にとどめること。

a) 雑誌論文の場合

- ① 【和文文献】著者名，出版年，「論文のタイトル」『雑誌名』巻(号)：論文の初ページ-終ページ。

巻号は、巻数の後に続けて半角の丸カッコ内に号数を記載する。巻(号)の後に半角コロンと半角スペースでつないで、論文のページ数を記載する。なお、巻号の代わりに、第〇号，第〇集，第〇輯などを用いている場合にも、その号数のみを記載すればよい。巻号によって刊行されている雑誌のページ数の記載にあたっては、当該雑誌の号によるページ数ではなく、その巻を通してのページ数を記載する。同じ巻でのページ数の重複による混乱を避けるためである。

【例】宮本みち子，2000，「社会変動下の『若者と家族』研究の展開と方法——イギリス青年社会学を中心にして」『家族社会学研究』12(1): 95-109。

また、原則として雑誌論文の場合は出版社名（発行元）を記載する必要はないが、雑誌名だけでは発行元がわかりにくいときは、次のように『雑誌名』の後に発行元を記載する。

【例】桜井厚，1993，「ライフヒストリー調査雑感」『三色旗』慶應通信，549: 11-4。

- ② 【欧文文献】著者名，出版年，“論文のタイトル，” 雑誌名，巻(号)：論文の初ページ-終ページ。

論文のタイトルには“ ”を付ける（イタリック体にはしない）。必要に応じて単語の最初の文字を大文字にする。論文のタイトル中に“ ”が使われているときは，‘ ’に変える。末尾に論文のページ数を記載する。雑誌名はイタリック体にする。巻号は、巻数の後に続けて半角の丸カッコ内に号数を記載する。巻(号)の後に半角コロンと半角スペースでつないで、論文のページ数を記載する。

【例】Thornberry, Terence P., Carolyn A. Smith and Gregory J. Howard, 1997, “Risk factors for teenage fatherhood,” *Journal of Marriage and the Family*, 59(3): 505-22.

b) 著書の場合

- ① 【和文文献：単著】著者名，出版年，『タイトル——サブタイトル』出版社名。

書名には二重かぎカッコ『 』を付ける。書名にサブタイトルがあるときは、タイトルとサブタイトルのあいだは、——（2倍ダッシュ）でつなぐ。なお、文献の奥付けでのサブタイトルの記載において、スペースや：（コロン）などの記号

が用いられている場合でも、——（2倍ダッシュ）でもってサブタイトルの表示をする。また、講座名など、かならずしもサブタイトルとは言えない語句と書名とが併記されている場合は、たとえば、『講座社会学 12 環境』というかたちで、基本的には奥付けに記載されたまゝを記入し、各語句のあいだに半角のスペースを入れる。「新版」「第2版」などの書誌情報も同様にあつかう。

【例】山田昌弘，1999，『パラサイトシングルの時代』筑摩書房。

落合恵美子，2004，『21世紀家族へ——家族の戦後体制の見かた・超えかた 第3版』有斐閣。

- ②【欧文文献：単著】著者のファミリーネーム，ファーストネーム ミドルネーム，出版年，タイトル：サブタイトル，出版都市名：出版社名。

著者名のファーストネームをイニシャルのみにしてもよい（例：Broadbent, J.）が、ひとつの論文の文献リストでは一貫した記載の仕方をしなければならない。タイトルとサブタイトルは、イタリック体にする（イタリック体が表記できない場合はアンダーラインをつけておく）。タイトルとサブタイトルのあいだは、半角コロンと半角スペースでつなぐ。コロンの代わりに、一やーを用いてはならない。英語の本のタイトルとサブタイトルは、途中の冠詞と前置詞・接続詞を除き、単語の最初を大文字にする。ドイツ語の本の場合は、タイトルとサブタイトルの冒頭の文字および途中に出てくる名詞の最初の文字を大文字にする。フランス語の本の場合は、固有名詞を除き、タイトル全体の冒頭の文字のみを大文字にする。かりに、原書のタイトルがすべて大文字で書かれている場合でも、この文献記載法に従わなければならない。出版都市名と出版社名のあいだは、半角コロンと半角スペースでつなぎ、最後に必ずピリオドをうつ。

【例】Cheal, D., 1996, *New Poverty: Families in Postmodern Society*, Westport: Greenwood Press.

- ③【和文文献：編書内論文】著者名，出版年，「論文のタイトル」編者名編『本のタイトル』出版社名，論文の初ページ-終ページ。

論文のタイトルにはかぎカッコ「」を付ける。論文のタイトル中に「」が使われている場合には、そのカッコは『』に変える。末尾にページ数を記載する。また、共著の本に収録された論文についても、同様に記載する。

【例】磯田朋子，1996，「家族の私事化」野々山久也・袖井孝子・篠崎正美編『いま家族に何が起きているのか』ミネルヴァ書房，3-27。

- ④【欧文文献：編書内論文】著者名，出版年，“論文のタイトル，”編者名 ed.，本のタイトル，出版都市名：出版社名，論文の初ページ-終ページ。

編書のなかに収録された論文のタイトルも、雑誌論文の場合と同様にする。編者名は、ファミリーネームを先にせず、通常の語順のままとする。

【例】Stein, P. J., 1985, “Singlehood,” E. D. Macklin and R. H. Rubin eds., *Contemporary Families and Alternative Lifestyles*, London: Sage Publications, 24-47.

c) 編書の場合

- ①【和文文献】編者名編，出版年，『タイトル』出版社名。

編者名の後に「編」の字を入れる。ただし、編者が団体であるときは「編」の記載を省略する。

【例】正岡寛司・望月嵩編，1988，『現代家族論』有斐閣。

【例】全国民生委員児童委員協議会，1975，『わたしたちの民協活動』全国社会福祉協議会。

②【欧文文献】編者名 ed.，出版年，タイトル，出版都市名：出版社名。

欧文の場合，編者名の後に ed.を入れる。ただし，編者が団体であるときは ed.の記載を省略してもよい（ひとつの論文のなかでは省略するかしないか一貫させること）。

【例】Lamb, Michael E. ed., 1997, *The Role of the Father in Child Development*, 3rd Edition, New York: Wiley.

編者が複数の場合は，次のように編者名の後に eds.を入れる。

【例】Goldberger, Leo and Shlomo Breznitz eds., 1982, *Handbook of Stress*, New York: The Free Press.

d) 電子化された資料

論文で引用または参照されている電子化された資料については，すべて文献リストに記載する必要がある。

①電子書籍

著者名，出版年，『タイトル』（紙媒体の刊行年，出版社），電子媒体出版社，（取得日，URL）または（フォーマット）。

電子書籍については，紙媒体の書籍の場合と同じ書誌情報に加え，その書籍を閲覧したさいに用いた媒体の種類を明示する（なお，インターネット利用の場合は URL と取得日を記載）。

【例】藤竹暁，『図説 日本のマスメディア（上）新聞・放送・出版』（2005，日本放送出版協会刊），電子書店パピレス，（2009年1月10日取得，<http://www.papy.co.jp/sc/list/genre/030-043-020-000?page=2>）。

②電子ジャーナル

著者名，出版年，“論文のタイトル，”雑誌名，巻(号): 論文の初ページ-終ページ，（取得日，URL）。

【例】Gabb, Jacqui, 2009, “Researching Family Relationships: A Qualitative Mixed Methods Approach,” *Methodological Innovations Online*, 4(2): 37-52, (Retrieved January 22, 2010, <http://www.methodologicalinnovations.org/viewissue.html>).

著者名，出版年，「論文のタイトル」『雑誌名』巻(号): 論文の初ページ-終ページ，（取得日，URL またはデータベース名）。

紙媒体と電子媒体の両方で提供されている雑誌を，電子媒体で利用した場合は次の例に従う。

【例】上野千鶴子，2008，「家族の臨界——ケアの分配公正をめぐって」『家族社会学研究』20(1): 28-37，（2010年1月22日取得，http://www.jstage.jst.go.jp/browse/jjofffamily sociology/20/1/_contents/-char/ja/）。

③ウェブページ・ブログなどウェブサイト上に掲載された情報

著者名，最終更新年，「タイトル」，ウェブサイト名，（取得日，URL）。

ウェブページ・ブログなどウェブサイト上に掲載された文書についても，紙媒体と同じ順序で，同様な文献情報を記載する。さらに，出版年（最終更新年）に加えて取得日（アクセス日）を記載する。「タイトル」には，サイト全体のタイトル（ホームページのタイトル）ではなく，ウェブページのタイトルを記載する。

【例】日本家族社会学会，2010，「投稿規定及び執筆要項」，日本家族社会学会ホームページ，（2010年1月24日取得，http://www.wdc-jp.com/jsfs/magazine/mag_2.html）。

著者名，最終更新年，「タイトル」，ブログ名，記事作成日，（取得日，URL）。

ブログについては，ブログ記事の作成日を文献情報に含め，記事が固有のURL（固定リンクまたはパーマリンク）をもつ場合はそれを記載する。また，「タイトル」には，ブログの名称ではなく言及した記事のタイトルを記載する。

【例】上野千鶴子，「ちょっといい話——底辺校の現場から」，ちづこのブログ，2012年4月16日，（2013年7月5日取得，<http://wan.or.jp/ueno/?p=1501>）。

e) その他

①共著者の氏名はナカグロでつなぐ。ただし，カタカタ書きの外国人名を含む場合には，ナカグロに代えて，全角のスラッシュを用いる。

【例】原純輔・盛山和夫，1999，『社会階層』東京大学出版会。

杉本良夫／ロス・マオア，1995，『日本人論の方程式』筑摩書房。

②欧文の文献の場合，共著者の氏名については通常の語順のままとする。なお，著者名をつなぐ and は&としてもよいが，一貫性を保たなければならない。共著者が3人以上の場合は，著者名はカンマでつなぎ，最後の著者名だけ and（ドイツ語の文献の場合は und，フランス語の文献の場合は et）でつなぐ。

【例】Logan, John R. and Glenna D. Spitze, 1996, *Family Ties: Enduring Relations between Parents and Their Grown Children*, Philadelphia: Temple University Press.

【例】Duncan, Greg J., W. Jean Yeung, Jeanne Brooks-Gunn and Judith R. Smith, 1998, "How Much Does Childhood Poverty Affect the Life Chances of Children?," *American Sociological Review*, 63(3): 406-23.

③外国人名の表記においては，姓名間のカンマは省略しない。

【例】Gubrium, Jaber F. and James A. Holstein, 1990, *What Is Family?*, Mountain View, Calif: Mayfield Publishing Company.（中河伸俊・湯川純幸・鮎川潤訳，1997，『家族とは何か』新曜社）。

④大学紀要や研究機関紀要は誌名の後に機関名を表記する。

【例】石原邦雄，1987，「噴火災害によるストレスと住民の適応」『人文学報』（東京都立大学人文学部），194: 169-94.

⑤科学研究費の調査報告書については，研究代表者のほかに研究分担者がいる場合，研究代表者名の後に「編」を付ける。研究実施の年度の表記は，下記の例のように元号でなく西暦に変えてもよい。科学研究費によるもの以外の調査報告書の記載についても，これに準ずる。

【例】野々山久也編，2000，『現代家族の変容と家族ライフスタイルの多様化に関する実証的研究』1997-1999年度科学研究費補助金研究成果報告書（研究課題番号：09410060），甲南大学。

⑥政府刊行物および地方自治体などによる刊行物の場合で，編集元と発行元が同一のときは，発行元の記載を省略してよい。

【例】多治見市，1987，『多治見市史——通史編下』。

14. 図表は本文とは別に添付し，挿入箇所を原稿の右の余白部分に指示する。

1) 図表タイトルおよび説明等は，以下の順とする。

a) 図の場合

図版の下に，図の注，図の説明，出典，その下に図タイトル

b) 表の場合

表タイトルの下に，表本体，表の注，説明，出典

- 2) 図表番号は「図1」，「表1」のように示し，それぞれ通し番号とする。
- 3) 出典は，著作権等の関係から，オリジナルの場合を除き必ず明記する．必要に応じて原著者または著作権所有者から使用許可を得ておく。
15. 投稿論文の査読は，著者名等をブラインドに行っている．文献等の表記の際には，ブラインドにすべき箇所が最小限ですむよう，本人の著であっても，「筆者」「拙著」等とせず，著者名で表記する。
16. 掲載にあたっては本誌編集方針に則って，漢字・平仮名表記の別など，多少の原稿整理をすることがある。

付 記

2013年8月1日の執筆要項の改訂にあたっては、『社会学評論スタイルガイド（第2版）』（日本社会学会編集委員会 2009）を参考にさせていただいた。同編集委員会には，記して感謝の意を表したい。